

読者のページ

テヘランの今を思う

学校法人錦城学園／非常勤講師
小高 幹陽 ODAKA Mikiharu

❖はじめに

2022年秋から翌年春までの半年間、私はイランのテヘランに滞在した。大学で専攻していたペルシア語を習得し、ペルシア語を公用語とするイランという国について、もっと知りたいと思ったからだ。イランは正式には「イラン・イスラーム共和国」といい、イスラーム教の中でも少数派であるシーア派を国教とする国家だ。シーア派の特徴の一つは、ムハンマドの娘婿であるアリーへの信仰で、イランではその誕生日は祝日となっている。またアリーの子、フサインの悲劇的な死を子供たちが学会会で演じる、重いものを運ぶときの掛け声が「ヤー、アリー!」になっているなど、シーア派信仰はイランの文化として日常に溶け込んでいる。日本との時差は5.5時間、約

8,000km離れたいわゆる「中東」と呼ばれる地域に位置し、テヘランはその首都である。この国に対する当時の私のイメージは漠然としたもので、「戦闘」「経済制裁」といったどちらかと言えば暗いものだった。折しも、到着前日に大規模な反体制デモが起きたことを経由地であるドーハの空港で知り、テヘランでの半年間を無事に過ごせるのだろうかという不安な気持ちを抱いた。しかし実際のテヘランは、人々のつながりにあふれ、ゆったりとした時間が流れていた。

❖猫の街・テヘラン

テヘランの街中を歩いていると、必ずと言っていいほど猫を見かけた。日本の路上にハトがいるよう



写真2 住んでいた寮の部屋



写真3 テヘランの猫

に、テヘランには猫があふれている。人々も猫がいる日常に慣れているようで、餌をあげて世話をしている人もいれば、餌をねだってくる猫をうっとうしそうに払いのける人もいた。私は語学学校の寮に滞在していたが、寮にも野良猫が頻繁に入ってくるため、寮生でかわいがっていた。猫といえば魚と思い、日本から持って行った煮干しを差し出してみたこともあったが、食の好みが違うのだろうか、猫は見向きもしなかった。

❖イランの食

イランの人々の主食はナンや米である。米は長粒種と呼ばれる細長く粘り気の少ない種類で、白米で提供され、日本のようにおかずと一緒に食べたり、混ぜご飯にして食べたりする。米と一緒に食べる料理としては、キャバーブと呼ばれる羊のミンチ肉の串焼きや、ホレシュトと呼ばれるトマトで羊肉を煮込んだシチュー料理が定番だった。またナンは主に朝食で食べられていて、朝方に焼き立てのナンを素手で持ち帰る人の姿を多く見かけた。乳製品の生産も盛んなイランでは、焼き立てのナンにバターやチーズ、はちみつ、ニンジンのジャムなどをつけて食べるのが朝食の定番である。スーパーに行くと、タマネギ、ニンジン、キュウリ、キャベツなど日本でも見慣れた食材がそろっていた。しかし、イスラーム教徒は豚肉を食べないため、豚肉およ



写真4 ホレシュト（右手はお焦げ付きのご飯）



写真5 朝食の定番 ナン

びベーコンやハムなどは一切手に入らない。私はパスタやトマトをよく買って、寮のキッチンで自炊していた。果物の種類が豊富で、スイカ、メロン、ザクロ、イチジクなどもよく買って食べた。

❖乾燥の激しさ

大陸性気候のテヘランは昼夜の気温差が激しい。特に夏は、日中は日差しがきつく、外出する際には日焼け止めが欠かせない一方で、夕方はからっとして過ごしやすく快適だった。そして乾燥がすさまじい。ナンを放置しておくと翌日にはパリパリになっていたり、洗濯物も前の晩に干したものが翌朝には必ず乾いていたりするほどだ。夏は高温乾燥のテヘランも秋から冬にかけて湿潤となり、1月、2月には雪も降る。

❖イスラーム教と日常

イランでは、イスラーム法により女性は髪を隠し、露出の多い服装、体のラインが出る服装を公衆の場で着ることは禁止されている。また男女の別も厳しく、地下鉄車両は鉄格子が男性用と女性用を隔て



写真1 2月のテヘラン



写真6 街中のモスク

ている。美容室、ジムなどは男性専用、女性専用になっていたり、利用時間が男女別だったりする。同じくイスラーム法によって、酒を売買したり飲んだりすることは禁止されている。他のイスラーム教国（イスラーム教徒が多数を占める国）と比較すると酒に対する規制はより厳格だ。イランでは表立って酒を飲むことが禁止されているので、密造酒の製造が横行していたが、トルコではレストランで酒を飲むことができる。酒に代わる嗜好品として、イランでは特にチャイと水たばこが好まれている。水たばこはチャイハネと呼ばれる専門店やカフェで提供され、私はチャイを飲みながらゆっくりと水たばこを嗜む様子をよく見かけた。チャイは専用のグラスがあり、3口ほどで飲み切ることができる。この小さなグラスに何度もチャイを注ぎ、友人や家族とともに時間を過ごすのがイランのチャイ文化だ。旅先のチャイハネで、私に声をかけてくれた現地の人と一緒にチャイを飲みながら話したこともあった。

❖イラン人の精神性

イランの人々は一般に、客人に対するおもてなしの精神があると言われる。旅行者を家や食事に招待することも多い。一方で、イランには「ターロフ」と呼ばれる文化もある。これは日本でいうところの

「社交辞令」に近いものだ。例えば、外食しようと店に入ったら、見ず知らずの先客が自分の料理を指しながら「どうぞ」と勧めてくるが、ここで勧められるままに食べてはならない。自分の料理が先に来たら、まだ料理が来ていない周りの人に料理を勧め、勧められた人は「召し上がれ」と声をかけて断るというのが、イラン人のマナーなのである。しかし、ターロフなのか本音なのか判別するのは容易ではない。ある時、道端で苦しそうにしている男性を助けたこと



写真7 テヘランの人々

があった。男性はお礼をしたいということで、私を息子の結婚式に招待してくれた。私はまたとない機会だと喜んで参加したが、結婚式当日に男性に連絡してみると、「本当に来るの?」と言われたので、今思えばその誘いもターロフだったのかもしれない。また夜行バスに乗った時、仲良くなった隣席のイラン人がサービスエリアで一緒に食べようと言ってフライドポテトを買ってきてくれた。てっきりおごりかと思ったら、食べた後にレシートを見せられ、自分の分の代金はきっちり請求された。イラン人が客人に優しいのかそうでないのか、私ははっきりとはわからなかったが、外国人である私をのけ者扱いするのではなく、話しかけ、関わりを持とうとする姿はとても印象深く残っている。

街中で人々に助けられることも多かった。八百屋では、翻訳アプリを片手に野菜の名前を調べていた私に、一つ一つ名前を教えてくれた人がいた。なじみの雑貨店の店主は、他に客がいても「何か必要なものはないか」と必ず声をかけてくれた。テヘランの路線バスに初めて乗った時は、乗り降りの仕方を教え、自分は先に降りるからと言って、隣の乗客に「あとはよろしく」と頼んで降りて行った人がいた。地下鉄に乗るために切符を買おうとして、券売機が故障していて切符を買うことができなかった時、私に声をかけ、有人の窓口まで案内してくれた人がいた。どれも些細な出来事ではあるが、初めての土地で暮らす私を、テヘランの人々はさりげなく助けてくれた。

別の日、また地下鉄に乗ろうとすると、今度はクレジットカードでしか切符が買えないようになっていた。幸い私はクレジットカードを持っていたので購入することができた。ふと横を見ると現金を握り



写真8 テヘランの交差点 写真左が地下鉄の出入り口

しめたまま困惑した顔でこちらを見ている親子連れがいた。私はなんとなく「代わりに買いませんか」と声をかけた。カードで切符を買い、母親に渡すと、母親はありがとうと笑顔で言って、改札へ向かった。日本に帰ってきてからも、地下鉄の券売機で頭を抱える外国人を見ると、なんとなく声をかけてしまうことがある。知らないうちに、私もテヘラン住民の一人になっていたのかもしれない。

❖おわりに

2026年、イランはアメリカ・イスラエルとの戦争状態にある。私が滞在したあのテヘランもミサイルや空爆による攻撃を受け、戦争は長期化しつつある。今、日本のニュースではイランの話を書かない日はないが、そこで現地の人々の日常が取り上げられることはほとんどない。3年前、私が訪れたイランは戦争をしている国ではなかった。大規模な反体制運動はあったが、市民の生活が破壊されることはなかった。イランの人々は日本の私たちと同じように、朝は職場や学校へ向かい、夜は家に帰って家族と団らんし、そして翌朝には出かけていく。そんな日常を続けていた。この先、イランがどんな状態になったとしても、我々と同じように生活を営む「普通の人々」がいることを、私は決して忘れることはできない。イランはこれからどうなっていくのか。現地を訪れ、そこに生活する人々を目にした一人として、これからもイランに関心を持ち続けていきたい。